



東九州支部報

第67号

公益社団法人日本山岳会 東九州支部
2014年10月25日(土)発行



第13回青少年体験登山大会（9月23日（火）・久住山頂にて）

目次

支部活動報告		ペンリレー(14)	12
第13回青少年体験登山大会	2	三角点と山城探訪シリーズ(12)	13
第9回韓国山岳会蔚山支部の交流登山	3	私の無名山ガイドブック(55)	14
8月月例山行 福智山	5	会務報告	
9月月例山行 鞍岳・ツームシ山	6	登山入門講座・座学講座終わる	15
スズタケ枯死とシカの食害調査	7	支部合同会議報告	16
登山教室受講者による槍ヶ岳登山隊	8		
個人投稿		お知らせ	17
より安全な登山のために(14)	11	後記	18

絶好の登山日和のもと 第13回青少年体験登山大会

13年回目(13回)を迎え得る青少年体験登山大会。今年から「青少年登山教室」と冠を追加して、より学習性を高める山登り体験を考慮しての実施である。大分駅前集合の参加者は38名、貸し切りバスは定刻7時を少し過ぎての出発。バスの中で加藤支部長から簡単に挨拶があり、そのあと、日程説明や登山中の注意事項などの説明。そして安全登山の心得や楽しい山登りの仕方などの説明。

バスは大分ICから湯布院ICを経由して九州横断道路を走り、ほぼ定刻の8時半前に登山口の牧ノ戸峠に到着。牧ノ戸峠には現地集合組26名が待っていた。合計この日の参加者は64名。そのうち一般参加者は52名、さらにそのうち青少年は11名と、青少年は例年よりやや少なめだ。しかし、この登山教室は青少年に限らず、広く一般の初心者も対象として、より多くの人たちに登山の体験をしてもらうことにより、山登りの楽しさや素晴らしさを知ってもらうことを目的として、13年前の『国際山岳年』の記念行事として始められたものだ。

登山口にあるレストハウス横の広場で開会セレモニー。先ず支部長があいさつ。続いてオリエンテーションで山道での注意事項や歩き方などを指導。中野会員のリードで、全員でウォームアップの柔軟体操を行う。そのあと、健脚組、元気組、のんびり組の三つの班に分かれる。健脚組は九州本土の最高峰、中岳まで足をのばして目的の久住山へ登り、帰りには星生山に寄り道して帰る。元気組は途中の星生山へ寄り道して久住山へ。のんびり組は寄り道せずに久住山へ往復。この班分けは参加者の自己申告に任せる。健脚組には中野、久保両会員が、元気組には佐藤(秀)、下川両会員が、人数の多いのんびり組には飯田、木本、園田、田所の4会員がリーダーとなって付き添い、9時15分健脚組から順次出発する。

この日は数日前から台風16号が九州本土をうかがっていたため、荒天が心配され、前日には決行可否かの決断を迫られるような天気で、登山口で中止または途中でUターンも考慮しての実施を決めたが、当日になると台風の進路が大分それてくれた。おかげで薄曇りの高曇り。降らず照らずの絶好の登山日和となった。

登山口からコンクリート舗装の登りから始まるこのルート、不慣れな登山者が最初からつい早足になって、稜線に登り着く前にへばってしまう道だ。リーダーがペースを抑えながら登る。30分で沓掛山稜線の肩に着く。天気が良ければ阿蘇五岳が手に取るように見える絶景地だがあいにく霧の彼方だ。目ざす久住山頂が扇ヶ鼻の頂の向こうに小さなおにぎりのような姿に見える。

ここから稜線歩きのアップダウンが続く。沓掛山の



(高校生グループ)



(小学生グループ)

岩峰から下り緩やかな長い登りになると、自己申告で構成された班分けなのでペースについていけなくて、健脚組から元気組へ、または元気組からのんびり組へと移る参加者も出てくる。各班リーダーがトランシーバーで連絡取り合っってそんな移動者の把握にあたる。

久住分かれ手前の広場で各班とも休憩。目ざす久住山頂が目の前にそびえ、初めて見る向きにはそのそそり立つような急斜面の巨体に圧倒され、「うわあ、あそこまで登らないと行けないのか」と、思わずため息混じりに声を発する。しかし登ってみると思ったよりたやすく登れるのを実感するところだ。

11時50分、のんびり組が最初に久住山頂に到着。

続いて直ぐあとに健脚組、少し遅れて元気組がつく。山頂は絶えず雲が流れて、時おり雲の切れ間に遠景が見えるが、直ぐに隠れる。そんな山頂に全員そろったところで記念写真撮影。そして思い思いの弁当を開いてお昼御飯。

12時50分下山開始。先発の健脚組は寄り道する星生山を目ざし、星生崎の斜面を登る。他の2班はのんびり往路を引き返す。全員がほぼ予定の午後3時過ぎに牧ノ戸峠登山口に下山。みんなの顔は達成感にあふれていて、「また来年も」という声が飛び交っていた。登りと同じ広場で、同じ中野会員のリードでクールダウンの体操。出発前のウォームアップと下山後のクールダウンの大切さも解説する。そして支部長のあいさつで閉幕し、マイカー組は峠で解散、バスの組は大分駅前解散。天気にも恵まれて、意義ある登山教室として終えることが出来た。

参加者…加藤(英)、星子(貞)、飯田(勝)、園田(暉)、木本(義)、佐藤(秀)、中野(稔)、田所(歳)、久保(洋)、下川(幸)、下川(智)、石神(貴)、中島(洋)、藤沢(容)、石川(洋)、渡邊(千)、池辺(明)、宮原(照)、土屋(多)、工藤(吉)、秋吉(け)、清水(道)、久留島(マ)、井上(紀)
(文責 飯田)

台風接近の中の韓国山岳会蔚山支部との交流登山

韓国山岳会蔚山支部と東九州支部の岳人同士の交流の場としては10回目、相互訪問交流登山が始まって9回目の今年は蔚山支部が日本訪問の順番だ。昨年、韓国の雪岳山での交流登山の時に、今年日本を訪れる時に登りたい山として候補にあがっていたのが深田百名山にもあがっている祖母山であった。その祖母山での交流登山を、半年ほど前から蔚山支部の李顧問と互いに連絡を取りあいながら10月11日～13日の連休に計画して準備してきた。

ところが、予定の日が近づくにつれ思わぬ心配事が起きてきた。900hpにもなろうという超大型台風19号が九州に接近しつつあったのだ。実施を危ぶむ声もある中、しかし予定どおりに蔚山支部一行は韓国を出発した。当方としては予定通りに現地に集結し、そこで直前の状況を見て判断するしかなかろうと決める。

第10回日韓山岳交流会(荻の里温泉にて・10月11日)



11日の朝「今福岡港に着いた。これから阿蘇を観光してそちらに行く」と蔚山支部のガイドから電話がかかった。東九州支部からの初日の交流会参加者は23名。午後4時頃までにはほぼ全員が交流会会場の竹田市荻町「荻の里温泉」に到着。ここで翌日の行動について協議。まだ台風の余波は強くないが次第が強くなるようすなので、明日の登山は当初予定の神原登山口から標高の高い宮崎県五ヶ所高原北谷登山口に変更を決める。しかし登山口までの林道にはバスが入らないため、支部会員のマイカーを総動員とした。

午後5時過ぎに韓国の一団15名(うち添乗員(通訳)1名)が到着。出迎える当支部会員と互いに再会を喜び合い握手とハグを交わす。そして午後6時から歓迎と親睦の懇親会だ。最初に加藤支部長が「昨年は雪岳山でお世話になりました。こうして山を愛するもの同士が国境を越えて交換できるのは嬉しいことです」と挨拶。続いて蔚山支部を代表して李顧問が「10年もこうして交流が続いているということは本当に素晴らしいことです。大分の山は私たちにとっては故郷の山と同じ気持ちです」と挨拶した。

興田副支部長の音頭で乾杯のあとは賑やかに和やかに酌み交わされ、当支部から阿部会員の日本舞踊の出しものや、オカリナやモニカ演奏など披露。その後



(風雨の中の祖母山頂上で)

は互いに入り乱れて歌や踊りが夜更けまで宴は続いた。

さて翌日(12日)の天気は台風が九州南岸へ接近中だ。まだ雨は降っていないが荒天が予想される早めの行動が求められる。午前8時に宿を出発して、11台の車に分乗して五ヶ所高原北谷登山口に移動。登山口にはこの日だけの参加者が待っていて、27名が韓国のお客15名を伴って登り始める。出発時の午前9時30分ごろにはもう小雨が降り出し、谷間なのに風も出てきた。雨は次第に本降りとなり、風も強くなってきたが、この登山道は終始樹林の中なので風はさほど感じないですむ。

11時過ぎに長い列が順次山頂に立つ。しかし、林の中を登る時にはさほど感じなかったが、山頂は突風が吹き荒れていた。早々に九合目の小屋に降りて昼食だ。狭い小屋の中は満員状態で、外の軒下で食べる組も多い。そして12時10分下山開始。雨と風に追われるように下っていく。40人も列が山道を往復すると最後尾はすっかりぬかるみとなり、歩くのも一苦労するありさま。北谷登山口に降り着いたのは午後3時過ぎだ。ここで今日だけの参加者と別れて、連泊組は荻の里温泉へと急ぎ帰る。そして温泉でゆっくりと暖まったあとは、前夜に続いて賑やかに和やかに宴会だ。参加者全員がサインした支部旗を互いに交換。こ



の夜も遅くまで宴は盛り上がったが、外は暴風雨だ。

翌13日は、台風が午前9時頃薩摩半島に上陸して九州全域が暴風雨圏の中、予定していた越敷岳と緩木山はもちろん中止。午前10時に宿舎の玄関前でお別れの挨拶。全員が互いに握手とハグで、来年の再会を誓い合い、韓国一行のバスを見送る。天気には恵まれなかったが、目的の祖母山には登れて、互いの親交を深めて大いに意義深い交流会であった。

参加者…加藤(英)、興田(勝)、西(孝)、阿南(寿)、野村(芳)、飯田(勝)、木本(義)、佐藤(秀)、中野(稔)、久保(洋)、下川(智)、阿部(幸)、桜井(依)(以上会員)、

渡部(昭)、木山(広)、石川(洋)、宮本(真)、宮原(照)、
飯田(修)、佐藤(ま) (以上会友)、飯田(ひ)、飯田(佳)、
友清(節) (以上ビジター)

12日山行のみ参加者…園田(暉) (会員)、中島(洋)、
荒木(真)、尾家(暁)、清水(道) (以上会友)、清水(久)
(ビジター) (文責 飯田)

福智山(900.5m)

8月月例山行報

若月 美智子 (会友161)

8月30日(土)

この夏は、各地で記録的な大雨が降り、山へ行く予定が狂った人々も多く、大変な思いをされたことでしょう。

私達も前日も大雨で、当日も降水確率50%でしたからその覚悟でいたところ、朝雨が止み朝日が昇り、信じられない位良いお天気になったので、木本リーダーのもと、皆喜びながら登山開始となりました。

福智山は、英彦山六峰のひとつに数えられ、役の行者が足跡を残した法修の霊山だそうです。古は、修験の行が盛んであったと記されています。登山コースも多く開かれています。

今日の登山口は上野(あがの)峡からです。8時30分、登山口スタート。白糸の滝ルート、約2時間の行程です。登り初めて5分ほどで白糸の滝につきました。滝は落差15メートル程で、途中まで川が流れていて、せせらぎが心地良い響きでした。そこからはしばらく急坂が続きます。

道端には、ヤマジノホトトギスがあちらこちらに咲いており、目を楽しませてくれました。途中で「虎の尾桜」への分岐や「源平桜」への分岐の標識などを見て登っていきます。登りはじめて1時間40分ほどで林を抜けてススキの中の道になり、視界が開けてきました。涼しい風が気持ちよいです。そして広いピークにつきました。その向こうに山頂が見えています。八丁の辻と呼ばれるところで、ここで一息入れて最後の登りです。

11時山頂到着。山頂には福智神社と鳥野神社の上宮の二つの石祠があり、一面草原で展望が素晴らかったです。360度のパノラマで、すぐ隣の平尾台のカルスト台地の眺めが印象的でした。貫山・英彦山方面、田川・北九州の町並み、関門海峡等が見えました。

(福智山山頂にて)



山頂で昼食休憩。集合写真撮影後、11時30分今度は、白雲ライン鷹取ルートで下山することになりました。少し下ると山小屋の前につきました。小屋の近くにはタヌキ水という水場があり、喉を潤す美味しい水でした。

少し下ると分岐があり、それを右に下りました。どんどん下っていくとやがて林道に出ました。そこで下る方向が間違っていることに気づきました。内ヶ磯(うちがそ)の方へと下っていたのでした。どうやら山小屋



を見ようと下ったのが分岐を通り過ぎたようでした。

そこから上野越へと登り返しです。スギ林の中の急な登りを登ると上野越の峠に着きました。左から下りに使いはずだった道

が来ています。峠の十字路から右に行くと鷹取山(633m)です。峠に先に着いた飯田・宮原・柴田・若月の4名はそこを目ざしました。

ここは、黒田武士で有名な母里太兵衛の居城であったとされています。クルマユリが二本だけ、ひっそりと咲いていました。

峠に戻るとみなと合流して上野峡へと下ります。途中で林道を横切り、溪流添いの急な下りが続きます。原生林の中、幅のある自然歩道を降りきると、出発点の上野峡登山口です。15時30分下山しました。本日約7時間の程よい行程でした。

秋の気配が感じられ、さほど暑くなく、爽やかなお天気に恵まれて楽しい一日となりました。飯田さん、

柴田さんいつも車を出して下さって、ありがとうございます。運転お疲れ様でした。



(鷹取山山頂にて・背後は福知山)

参加者…木本・飯田・中野・宮原・柴田・後藤・長野・若月

**鞍岳(1117.8m)・ツームシ山
(1064m)**
9月月例山行報告
田所 歳朗 (14024)

9月13日(土)目が覚めて外を見ると弱い雨が降っている。天気予報を見ると、曇のち晴で朝と夜はところにより雨が降るとの予報。自宅を出発し集合場所の大分駅上野の森口(南口)に向かう。参加者全員が定刻通りに集合し6:00に鞍岳に向け出発。この頃には雨は止んでいた。ミルクロードに入ると霧で視界が悪くなり安全運転に心掛ける。

8:20鞍岳登山口第2駐車場に到着。今回は登山入門教室の同総会員が参加しており、まずは自己紹介。今回の参加者名簿で苗字が違うのに住所が同じという男女が一组あり、「えっ! どういう関係なんだろう。触れても良い話題なのだろうか?」と悶々としていたが、ただのミスプリントだった。準備運動をして8:30登山開始。

初めて登る山でリーダーを任命されたので、事前の下見をしておいた。「登山教室の同窓会メンバーも参加するピクニックです」と事務局から連絡がありルート

設定にとっても悩んだ。「キャンプ場の方から登ったらピクニックじゃないな」「鞍岳往復は短すぎるな」と悩み抜いた結果が本日のルートで、駐車場→女岳→鞍岳→ツームシ山→孫岳→ツームシ山→駐車場である。登り始めるとすぐに分岐になる。

この分岐は第一駐車場からの登山道との合流点で、左に行くと子岳がある。参加者は子岳に登りたいようであるが「しまった。子岳を下見していなかった。」視界が悪く登山道がイメージできない。もし、分岐が分からず初っ端から右往左往してしまうとリーダーの尊厳に関わる。

ここは子岳を我慢して予定通りに進む。8:45女岳と鞍岳の鞍部の分岐を左折しすぐに女岳に到着。参加者の半数が女性の為、いつもより華やかで会話も弾んでいるように感じる。風が強くと体温が低下するので、私の感覚で頂上トークは約10分で出発。9:05鞍岳に到着。



(鞍岳山頂にて)

三脚を立て記念撮影をしていると、強風にあおられ三脚が今にも倒れそう。写真には「あ〜!」という顔をして写っているかもしれない。ここで、おやつに濡れせんべいを頂いた。実は濡れせんべいの事がずっと気になっていた。「どんなせんべいなんだろう?」濡れせんべいの前で何度悩んだ事か。これは美味い次回からは迷わず買う事にした。悩み事が一つ解決した。鞍岳を後にし、馬頭観音に立ち寄る。祠の中にひっそりとたたずむ観音像。どこかのお寺の奥の院になるようであるが、専門知識がない為ここではあまり触れないでおく。次に向かうはツームシ山。最近、プロ野球で耳にするツーシムと言う球種を連想してしまう山名である。ツームシとは方言でカブト虫の事らしい。鞍岳からツームシ山の縦走路は林道への分岐が多い。縦走路は背の高い木々の中を通るのでどの分岐もなんとなく風景が似ている。標識に番号を書いているので何番が林道のどこに出るのか覚えておくと良い。(番号は

誰か後から書き足したもの) 10:05 ツームシ山に到着。天候も徐々に回復してきて、登ってきた山が見える。登り損ねた子岳も見える。頂上10分トークをして孫岳に向かう。ツームシ山から孫岳の間は登山道にススキが覆い被さっている。ススキを掻き分けながら進み10:30孫岳到着。孫岳の頂上は他の山に比べ少し狭い。ここからは引き返す。ツームシ山に引き返す途中に小さい花が咲いていて(行きと同じ道だが私は全く気付かなかった) ヤマジノホトトギスという名前らしいが、私には花の形がふくろうに見えた。天候もずいぶん良くなりツームシ山の頂上で昼食にする。子岳が良く見える。時間にも余裕があるし、やはり子岳にも行かぬば。昼食後は縦走路を引き返し標識左隅に4と書かれている分岐から林道に向かう。林道



(ツームシ山から下山)

に出ると林道の標識には5と書かれている。(おそらく縦走路の分岐の標識4・5が合流して林道の標識5にでるのだろう) ここから駐車場まではすぐである。12:00駐車場着。車に荷物を置いて子岳に出発。第1駐車場まで林道を歩き、第1駐車場登山口から登る。視界も良好でこれなら迷う事はない。12:15子岳到着。これで今日5峰制覇である。子岳からは女岳の反対側の斜面が良く見え、女岳直登の険しさが想像できる。頂上10分トークを済ませて第2駐車場へ下山。時刻は12:35。少し早いがここで解散となった。

今回の山行は初めてリーダーを任命され精神面の疲労が大きかった。登山教室同窓会のメンバーも多数参加してくれたのに、あれで良かったのだろうか?満足してもらえたのだろうか?しばらくは悩める日々が続くそうである。せつかく濡れせんべいの悩み事が解決したのに、新たな悩み事が生まれた。

参加者…飯田(勝)、木本(義)、佐藤(秀)、中野(稔)、田所(歳)、久保(洋)、藤沢(容)、長野(珪)、遠江(洋)、岐部(威)、宮原(照)、若月(美)、井上(紀)、(以下登山

教室同総会)佐藤(文)、重野(典)、松田(信)、房前(玲)、田中(ビクター)

スズタケ枯死とシカの食害調査報告

飯田 勝之 (10912)

大分県植物研究会との共同作業のスズタケ枯死とシカの食害調査去がる10月4日(土)本谷山西の稜線で行われた。昨年6月1日(土)に1回目の調査を行って以来、10月と6月の年二回の行う観測調査は今回4度目の作業である。

昨年10月の作業時も同じであったが、この日も稜線の北側から絶えず冷たい風が吹きつける寒い一日となったが、昨年は雨交じりの寒風であったのに比べて今回は薄曇りの天気であったのが救いである。

午前7時、緒方町の「道の駅原尻の滝」に集合したのは、東九州支部会員会友9名、研究会メンバーも9名で、7台の車に分乗して尾平トンネル宮崎側の登山口に移動。8時30分に登山開始で、約30分で尾平越の峠の稜線に着く。ここで定点観測組と、移動調査組とに分かれる。定点観測組は峠から約1.5km、1時間半のところに県環境企画課が設置した観測地地点へ直行。ここで、25m四方のネットで囲われた中



(定点観測のようす)

のスズタケの状況と、囲われていない隣接する25m四方の場所のスズタケの生育状況を計測する作業である。しかし計測するまでもなくシカの食害は一目瞭然で、ネットの中は背高く元気に生育しているが、ネッ

トの外はほとんどの笹の頭の部分が喰いとられて背丈が低いのが分かる。その状況を笹の背丈を計測して数値的に記録する作業である。我が支部の参加者のうち2名(渡部、井上)がこの作業に加わる。このほか植物研究会メンバー内では苔や植物の専門分野ごとの調査班がある。

一方移動調査組は、今回は峠から本谷山山頂までの稜線上の、幅20mほどの間の樹木の樹皮に残っているシカの喰い跡調査だ。多くの樹木の樹皮に喰い跡が残っているが、その喰い跡の古いのと新しいのに分類し、樹木の直径の大きさ分類し、さらに樹木の種類別に分類しながらその数を記録する。特に目につくのはヒメシャラやナツツバキ、リョウブなどの樹木はほとんどかじられていたのが目につく、峠から本谷山までの約3.3kmを計測し記録し終えたのが12時過ぎだ。

山頂は北からの風が強くて寒いので南に斜面の低灌木の中に風を避けて昼食だ。そのあと下山。定点観測地点まで下ると、ちょうど観測班も作業を終えて昼食



(本谷山山頂にて)

をすませたところで、合流して一緒に下山。午後3時前に下山し、駐車場の広場で反省会。この日の各担当分野ごとの作業の状況と感想等が述べられ、最後に次回の観測(平成27年6月6日(土))の再会を約して解散した。

参加者…飯田、中野、久保、井上、渡部(昭)、石川、渡辺(千)、宮原、加藤(ピジター)

登山教室受講者による槍ヶ岳 登山隊の報告

佐藤 秀二 (12019)

平成26年8月13日-8月17日

昨年の登山教室で、支部長が突如として発表した槍ヶ岳登山計画が計画どおりに実行されることとなった。本当に実行されるのか心配していたが、その心配をよそに受講生7名の参加者を集め8月13日予定どおりに出発した。今回、設定された表銀座からの槍ヶ岳登山のルートは、登山口の中房温泉から燕山荘、西岳から東鎌尾根を登るところが難コース。受講生は支部長の声かけによりこの日のために練習登山を重ね、3000m峰制覇のために汗を流してきた。

私は、練習登山最後の杉ヶ越から傾山山頂への九州でも屈指の難コースでの練習に参加した。7月末の杉ヶ越ルートは蒸し暑く、幾つもの上り下りの梯子やその後の急登が容赦なく皆を苦しめた。山頂までたどり着くのがやっとの状態である。このままで大丈夫かと不安に思ったが、皆槍ヶ岳への思いは強く、会友1名を加え総勢11名で槍ヶ岳に挑んだ。

8月13日早朝、先行1名を除く10名は誰一人欠けることなく大分駅に集合して出発。豪雨災害で一時不通になっていた名古屋-松本間は出発の1週間前に復旧し、JRを乗り継いで、登山口の中房温泉に午後3時30分に予定どおり到着した。中房温泉で早々に温泉に入り長旅の疲れと英気を養う。午後5時からの夕食時に翌日からの天気を確認すると、翌日から3日間、曇り時々雨と曇り一時雨の雨予報。予報が外れることを期待しながら部屋に戻った。午後9時の消灯に8時過ぎに床にいたものもいたが、早すぎて眠れない人に前回私が登山したときの感動や素晴らしい景色そして登山技術などの説明をし、そのうちに消灯をむかえ皆眠りについた。

8月14日午前4時、スマホの目覚ましに目覚めるとザーザーと雨の音か?と外に出てみると、うっすらと周りの山の稜線が見え雲はかなり上に見える。ヨッシャー!と出発の準備をして、この日は朝食抜きの午後5時出発予定。最初の急坂を考えるととても朝食抜きでは登れないと、昨夜配られた弁当の朝食を部屋で半分だけ早弁。おにぎり1個とカロリーメイト1本の貧相な朝食に「大丈夫か?」と不安を覚えたが、出発時間が迫り

玄関へ集まる。皆で元気な時に写真を撮り、午前4時55分中房温泉を出発した。合戦小屋まで長い急坂。支部長を先頭に第一ベンチ、第二ベンチ、第三ベンチと高度を稼ぐ。第三ベンチ頃からは燕山荘からの下山者との離合、支部長のペースダウンなどで予定時間より遅れ始める。富士見ベンチで休憩のあとおよそ15分で合戦小屋に着いた。

合戦小屋はスイカが食べられることで有名。スイカ売り場に行くと値段が800円。前回来たときは500円だったような？半分切りしていたので、半分切りしてもらって皆で400円ずつ払って食べた。(写真1)おもしろ



(写真1 合戦小屋にて)

いスイカを食べたあと、記念撮影して燕山荘に向けて出発。空模様は朝とあまり変わらず曇り。しかし、雲は確実に近づいている。小屋からの急坂を登り終えると、尾根の先に燕山荘が遠くに見えた。ここからおよそ50分、長い尾根の坂を登り切り午前10時10分に燕山荘に到着した。

到着の10分ほど前から降り出した雨は本降りとなり小屋の前は小屋の中へ入ろうと登山者がごった返している。天気が良いればここから槍ヶ岳が望めるが、今日は雲の中。小屋から燕山へは往復約1時間、7名が参加し頂上で記念撮影(写真2)途中コマクサなどの高



(写真2 燕岳頂上にて)

山植物が我々を歓迎するかのように咲いていた。燕山荘に戻った7名は早々に燕山荘で食事を取り、午後12時30分に出発。雨は小降りになったものの、燕山荘から天空の縦走路を、槍ヶ岳を望みながら進むはずであっただけに残念である。(写真3)



(写真3 天空の縦走路を歩く)

途中ですれ違った登山者が「朝の5時30分まで槍ヶ岳が見えました」と言っていただけになおさらのこと。縦走路に咲いていた様々な高山植物が、せめてもの慰めであった。午後14時50分に大天井・常念岳分岐に到着。大天井岳に登りたい者もいたが、まっすぐにトラバース道を大天井ヒュッテに向かった。ところが、このトラバース道が意外にも険しく、小さな尾根を岩や断崖を乗り越え、鎖のあるところも越えながらの約1時間であった。午後15時45分に大天井ヒュッテに到着。大天井ヒュッテで先行していた柳瀬さんと合流し全員が揃った。

夕食まで時間があつたので、すぐ近くの展望台になっている山に登り、槍ヶ岳の雲が空くの待ったがご機嫌斜め。ヒュッテに戻って夕食時に、ヒュッテのご主人が「明日の天気は…」と、もったいぶって話すので、少しは良くなるかと思ったら「秋雨前線が発生して下りてきそう」と残念な話し。一同がっかりして食事を取る。食事後明日への準備と有志で集まり談話をして午後9時の消灯に合わせて就寝。

8月15日小屋をたたく風の音で目が覚める。うとうとしているとスマホの目覚まし鳴った。ヒュッテの周りの草木は大きく揺れて風速10m程度の風が吹いている。朝食の時にヒュッテの主人が「これはそよ風」と皆を感心させたがこちらはやや不安。朝食後早々に出発準備し、昨日使った雨具等はほぼ乾燥し快適に着込んで午前5時30分にヒュッテの前で記念撮影(写真4)後に出発。縦走路が風の陰になる側にあるため結構快適。

35分でビックリ平に到着。ここでは突然大きな槍ヶ岳が望めるはずであろうことは想像できるが、槍ヶ岳は雲の中。ここから再び天空の縦走路を歩きヒュッテ西



(写真4 大天上ヒュッテ前)

岳へやや登りながら進む。思ったほど風の影響を受けず、雨も小降り以降ったりやんだり。西岳への分岐に到着した時に雨が本降りとなった。急いでヒュッテ西岳に向かい分岐から5分足らず、午前8時5分にヒュッテ西岳に到着した。玄関前が燕山荘の時と同じように登山者でごった返す。ここで槍ヶ岳に登るかどうかが判断しようと支部長と話していたので、とりあえず希望をとると、受講生はほぼ全員「登りたい」と返事。支部長が判断し「山は逃げないから」と、下山を諭した。ここから水俣乗越を下れば、槍沢ロッジに下れる唯一のエスケープルート。「天候が回復すれば、槍沢ロッジからでも登ることが出来る」と皆を納得させヒュッテ西岳を出発。ここから急坂を下るが、ここで大変な事実遭遇した。風雨の中ストック2本を片手に持って階段を上り下り、3点支持は岩にへばりついている。(練習をしているはずなのに)と、この天候で山頂まで連れて行けないとこの時点で強く感じた。

ヒュッテ西岳から約1時間10分で水俣乗越の分岐に到着。ここから槍沢ロッジへのエスケープルートを初めて歩くが、特に危険な箇所もなく普通の登山道で、槍沢大曲の分岐まで約50分、槍沢に沿ってさらに1時間10分、午前11時50分に槍沢ロッジに到着した。到着早々にびしょ濡れになった雨具と衣類を乾燥室に持って行ったがすでに多くの用具類が掛かっており、今後さらに増えることを考えると大変なことになったことは想像できた。昼食と風呂に入りしばし休憩。

夕食時、「槍ヶ岳に登りたい」「山頂にタッチするだけでもいいから行きたい」と言い出したので「残念だけど、皆さんの3点支持の技術では、この悪天候の中連れて行くことは出来ません」と最後通告を宣告すると、

少しの間があったあと、「リベンジしたい」「またやりたい」「やりとげたい」と次々に声が上がった。早々に支部長に報告し、「再び訓練から始めましょう」とまるで甲子園で負けたチームのような雰囲気となった。この夜、雨はさらに強まり一晩中雨音が絶えなかった。

8月16日、雨音で目が覚める。昨日、槍ヶ岳への登山を諦めたので、結構落ち着いている。乾燥室に行ってみると、何もかもゴチャゴチャで乾燥機も止まり、全く乾いていない。早々に衣類を引き上げて部屋の周りの空いたところに干す。一眠りして、やがてスマホの目覚ましで目が覚めるが、すぐには起きない。朝食は5時からだが、今日は上高地までなのでゆっくり朝食を取ろうと思っていた。しかし、何となく小屋全体の雰囲気がまったりしていて、活気がない。結局、早めに食事を取って槍沢ロッジを午前6時20分に出発。

横尾山荘(写真5)ー徳沢園ー明神館ー河童橋ー西糸屋



(写真5 横尾山荘前で来年のリベンジを誓う)

山荘と時折り雨の降る中を歩き、徳沢園では名物のソフトクリームを、明神では明神池を見学し、午後11時50分河童橋に到着し槍ヶ岳登山を終了した。この日、「北アルプスで相次いで遭難」のニュースが流れ、槍ヶ岳の岐阜県側の沢で遭難が発生。結果的に撤退したことが正解だったのではないかと思えた。

8月17日は、朝食後に上高地のウエストーン碑を見学し、日本山岳会の山岳研究所を訪問。その後、上高地を9時過ぎのバスに乗って松本へ向かい、名物のそばを食べて、JRで大分へ帰省した。

受講生は、雨の登山で槍ヶ岳に登頂できなかったが、雨の3000m級の山の登山を体験し、多くのことを学ぶことが出来たと語っていた。撤退することもその1つとなった。この槍ヶ岳登山隊は強い結束が生まれ、再び厳しい!? 訓練を積み重ねて、来年「リベンジ槍ヶ岳登山隊」(仮称)となり、槍ヶ岳を目指す。

なお、この登山隊に参加してみたい人は、[佐藤秀二](#)

[syuji-satoh@ezweb.ne.jp]か、加藤支部長まで連絡ください。

[最高到達点] 西岳付近2770m

参加者…加藤支部長、佐藤秀二、中野稔、薬師寺正憲、尾家暁夫、宮原照昭、櫻井衣里、柳瀬里子、清水道枝、清水久美子、工藤吉子(順不同)

個人投稿

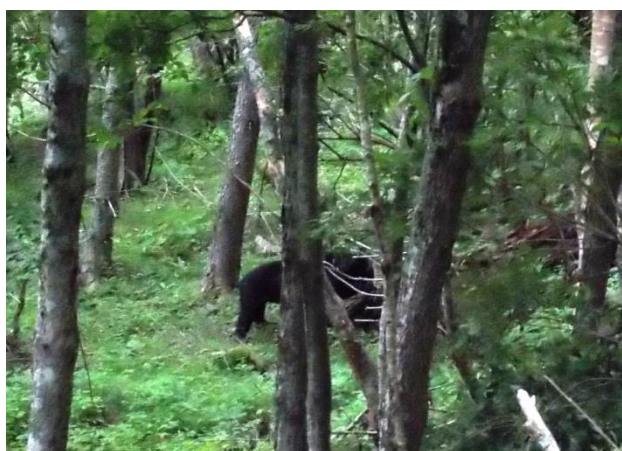
より安全な登山のために No14

安東桂三 (9193)

『安全意識・熊に遭遇』

今年の夏は雨多く、冷夏の場合も多かった。その為市販の野菜は値段が高く、我々の経済にもすこし影響があった。山の動物たちにも影響があったかもしれない。今までの山行で何度か親父にあったことがあったが、今回写真を撮ることが出来た。親父とは熊のことを言う。祖母傾山群にも、親父岳と言う山があるがこの親父は熊のことであり隣の障子岳の山頂には「熊の社」が祀られている。(山親父は、罨のこと。森の親父は月輪熊のこと)

今年の8月初旬、南アルプスの北岳。広河原から肩の小屋に登り、北岳山頂を往復して1泊。白根御池小屋経由で下山し、あと数分で広河原山荘へ到着するという場所で、小カーブを曲がった瞬間黒い物体を発見。それは熊(月輪熊)で、登山道の左山手で何か食べていて、次に登山道を横切りまた右側の低地で何か食物を探すようにして、草薺に頭を突っ込んだ。我々はそ



(南アルプス広河原で遭遇した月輪熊(2014.8.4))

の際に登山道をそっと歩き、その場を遠ざかった。ない方が多い。『熊に遭遇したら』とネット検索する

といくつかの対策が出てくる。その対策は種々雑多で、熊に遭遇したら、よく死んだ真似をすると良いと言う常識があるが、この常識は非常識と言うことを知らどのように対応したら良いかと迷ってしまうほどだ。またどれが本当に正しいのかと思われるが、どのホームページやブログも「死んだ真似」は論外と決定づけている。いくつかの検索データから本当の対策と思われるものをまとめてみると、遭遇したらこちらが人間だと解らせる行動をとる。背中を見せて逃げない。襲われたら死にもの狂いで反撃抵抗する。無理なら腹這いになり、頭おなかを守る。このようなことであった。でも人間と解らせる行動をとっても、熊すべて人間を



(北海道の日高山脈の林道で見つけた罨の糞(2014.9.7))

知っていないかもしれないし、まれに熊が人間を食べる目的で襲うこともあるらしい。熊は時速60キロくらいで走るのだから、走って逃げることは不可能だ。熊鈴が必要というものもあったり、熊鈴は効果がないので大声のほうが良いというものもあった。親子連れの熊は特に注意で、遭遇したくないものだ。

山に行けば熊の気配を感じながら、熊の縄張りに入っているということを忘れずに行動したい。

『安全意識 御嶽山噴火』

今夏は雨ばかり。秋になってやっと天気が落ち着いてきたな、楽しい秋山だと思っていたら9月27日午前11時52分頃御嶽山が噴火した。紅葉時期の土曜日のお昼ごろ、たぶん御嶽山の山頂付近は、多くの登山者であふれていたと思う。そこへ噴火。この文書を書い

ている時点での被害の実態は、完全には把握されていないが、多くの登山者の生命が失われたと推察し、深く哀悼の意をこめながら思ったことを書こうと思う。

私は地質学や火山学のことは詳しくないが、先の3.11東日本大震災の大地震のあと、日本の地中深く歪が解消されず、地震と火山活動がお互いに影響していると言われている。3.11のあとあちこちで火山活動が盛んになり、九州でも阿蘇の中岳、霧島新燃岳、桜島と活発な活動をしている。

国内には、気象庁により活火山と定義されたものが、110山ある。我々の住む大分の近くには伽藍岳、鶴見岳、由布岳、九重山、阿蘇山と5山あり、由布山以外は、監視対象の山である。

8月30日、阿蘇山に出かけると噴火警戒レベルが、1から2に引き上げられた。午前9時13分中岳が噴火したと言う。火口から1キロ以内は立入り禁止となった。この日は仙酔峡から帰ったが、翌日の31日、仙酔尾根を登ってみた。天候悪くガスのなか、尾根上の岩には火山灰が薄く積り、岩を持ってば手が真っ黒、足場は滑りやすい。手をつくたびに真っ黒なのではたきながらの登山となった。

過去に阿蘇山では噴火活動により、数度被害があり、1950年以降で15人が亡くなっている。また火山ガス

でも数名が亡くなっていると記憶している。仙酔尾根は高岳への一般ルートであり、高岳へ登ったあと中岳へ縦走し、仙酔峡ロープウェイで下山するのがかつては一般的であった。ところが数年前ロープウェイ運休となり、山頂駅での有人によるガス検査が出来なくなり、この縦走コースは閉鎖された。しかし閉鎖されたコースを登山者が頻繁に通るようになり、自己責任で通るのであるが、なし崩し的にこのルート閉鎖は解放された。みんなで渡れば怖くない(?)か。今では一時閉鎖されたことがあったと忘れていた登山者ばかり。

気象庁では今月上旬から、御嶽山でやや活発な地震活動を観測していた。それは気象庁から地元の自治体へ報告していたが、それが噴火に結びつくとは考えてなかった。自治体では「注視」と言う判断にとどめていた。噴火の予知、地震の予知は難しい。でも登山者としては前述の熊と同様、火山に行けば火山(噴火)の気配を感じながら意識して行動したい。

(阿蘇山の警戒レベルを表す掲示板(2014.8.31))



ペンリレー・第14回

私が、山登りをはじめた動機

阿南寿範(8528)

1981年、私は静岡県にある富士山直下の標高900m朝霧高原にいた。背面には富士山の巨大な大沢崩れ。九州で見る高い山はせいぜい祖母山くらいだったのでとても感動した。西日が頂上の測候所に当たりまぶしく光る。私にとって最高の環境である。これからここで4年間を過ごす。九州を出る前は、3年間高校野球を続けたが目標の甲子園には届かなかった。ここでの生活は全寮制で1日のスケジュールが決められている。仲間は、北海道から沖縄県、インドネシア人も数名いた。外出できるのは、土日のみ。人恋しくなる。このような状況のなかで強く外に出たいという気持ちになる。

この学校には幸い山岳部があった。山岳部に入部すればここから抜け出せると思った。やっと馴染んで1ヶ月、5月の連休「中央アルプス」春合宿に参加した。一緒に入部した1年生は3名、1人は地元静岡磐田郡出身のO君、もう一人は、九州大分臼杵市出身のF君。彼は津久見高校の山岳部の出身であった。山の経験・知識は豊富。そのほか合宿に参加したのは、4回生、2名、3回生、2名、2回生、2名、総計9名、日本一の富士山を左手に見ながらバスでJR富士宮駅に向かう。ここから身延線で甲府へいき、中央線でさらに駒ヶ根駅まで行き、バスに乗り換え、しらび平に着く。登山がどういうものか知らなかった私は、体力だけには自信があったので、荷物を背負って歩くのにはさほどの抵抗がなかった。むしろ、学校を抜け出せたことに感謝・感激である。入学して1ヶ月足らず、装備・知識もなく出発、今回は3回生がCLとSLを務める、CLの指示でパーティは、しらび平ロープウェイ駅脇道を登り始めた。(通常なら一



般登山者は一気にロープウェイで千畳敷カールまで行く)日が暮の滝壺付近で暗くなったので、本日の行動はここまでとした。私が設営道具を背負っていたので呼ばれて、キスリングから10人用の三角テントをまず下ろした。4回生を除く全員で設営準備にかかる。設営場所は、川の中洲に設営した。設営を終え食事の準備に取り掛かった。天気は曇りで雨は降り出してなかった。

メニューはカレー、材料の野菜・米は、学校に食材を横流してもらっての確保、購入したものは、嗜好品と、ビールのみ。燃料はホワイトガソリンでホエーブス、メタでノズルを暖めポンピング、加圧して使う。(テントの中で使用は要注意)食事をとり、会話しながら飲むビールは最高である。星が流れるまで飲んだ。こんなに開放感ある場所があるならうまくやれるんじゃないかと思った。お国自慢を各自が始めた頃は、10時を回っていた。狭いテントでシュラフにくるまって寝るのははじめて、最初は寝付けなかったが、疲れのせいかすぐに寝てしまった。



朝、目が覚めると土砂降りの雨、テントの中は水位が体半分程度有り、どんどん水嵩が増えてくる。ここにいること自体危険である。CLの判断で朝飯も食わず撤収にかかる。雨に打たれながら必死に撤収、水を含んだテントは重く、ザックに入れにくく何とかしまふ。テント脇に置いてあるコッフェル等は水流の勢いでプカプカ浮き始めた。昨日チヨロチヨロ流れていた沢水は、濁流で水深も深く流れが速い。河底に見えていた転石は影も見えない。急がねば危ない。足元を確かめながら、水のない対岸に移動始めたが、対岸までは30m~40mある。足元をすくわれ、流され始めた。体制をとり直し一端引き返した。ザイルで体制を確保して一人ずつ、慎重に渡った。いくつかの幕営装備は流されたが何とか全員渡りきることができた。安堵した。

春合宿は、山の頂に立つことが目的だったが、それとは別にこれからの「山登りに対し貴重な体験」をした。これが山登りを始めて一番最初の経験である。春合宿では貴重な体験をしたが、山の良さ満足感は味わうことが出来なかった。山の楽しさ良さを知るために、山岳書を多く読むことにした。休みの日になるとヒッチハイクで東京神保町の古本屋に入りびたり古本の山岳書ばかり買い、寮に持ち帰り暇のあるたびに読み始めた。新田次郎の「強力伝」、「孤高の人」等々。加藤文太郎気分になり、ポケットに(小魚(イリコ)と甘納豆をミックスして行動食とする)等々、本を読むことにより、山の世界も段々と分ってきた。休みにになると三ツ峠のロックガーデンにて岩登りの練習をした。人気の場所であるため、時には順番待ちをすることもあった。ある日、どこかで見た覚えのある人が我々のパーティの後ろについた。「お先にどうぞ」と声かけると、「気にしないでゆっくりと行きなさいと」返してきた。後々の聞くと、その人は1991年ウルタルII峰で亡くなった長谷川恒男氏であった。徐々に知識・経験も増え、より高いところに行きたい気持ちになってきた。春は残雪の残る八ヶ岳・中央アルプス、夏は北・南アルプス、冬は単独峰富士山・甲斐駒ヶ岳・千丈岳と年間サイクルを、滔々4回重ねた経験が、昨今の私となった。

「御所の陣」と雄度牟礼城・小門山

三角点と山城探検シリーズ第12回
安部可人(友11)

大友氏から派生した国東の雄12代田原親宏と養子親貴が今回の主役です。「親貴の乱」(1580)は大友本家が広大な田原親宏の領地が欲しくていじめ・いやがらせて仕掛けたらしい。

1578年高城川ダケク淵(現地確認)で参敗して、大友離れが表面化します。宗麟が隠居して息子の義宗がお粗末すぎて、権力者・田原親宏が武將たちから嫌われていました。島津は「バカ殿なし」と言われますが、大友滅亡の戦役はこの2人です。この乱では田原親宏の急死と暴風で大友本家(兵力が少なかった)は危機を逃れます。

1. 御所ノ陣・331 飯田さんの無名山シリーズ成山3等三角点の記事の御所ノ陣以来10数年忘れていません。7m高の巨石の峰から北へ15分で、「虎口」・「堀切」の残る田舎

の小学校ぐらゐのすすき原が「御所ノ陣」跡です。不思議な「羊羹形の大石2本」は、明治の公園化計画で運び上げ放置されたものです。「親貫の岳」を鎮めるため、義統の弟・親家が此処を陣地とした(又雄度牟礼城に入城した)。「その昔18代大友親台がある事青で此処に逃げこんだ」は、今はまったくウソです。三浦梅園でさえ『小門山記』でそのロマン伝説を書いています。「御所」の由来此地元可愛れた英雄親台でしょう。19号台風の風倒木の根元から焼土(かまと跡)と土器が発見されました。居城ですね。好奇心抑えがたく此処から佐藤君と雄度牟礼城直下まで幅広尾根1kmを歩きました。親台落城の砌の伝承「カクリョウカタ(隠れ奥方)」「姫の隠れ岩」などが存在するのです。逃げ道ですね。あと300mのヤブこぎで「14曲がり」標識と繋がります。

2. 雄度牟礼城・小門山 535. 14等三角点 金湧から北上、直進の「御所の陣」入り口を西折して軽トラ道の終点。左右が暗い大岸壁、今にも石を落とされそうな登山口(正月息子と登山)。急登数分で左の尾根へ。「14曲がり」が始まります。植林の小径は結構きつい。45分で眺望の雄度牟礼城跡へ。電波塔が遺構を破壊しています。大古の火山跡のトンガリ山だから楽な道はない。天然の要害から平坦な山腹に通称「御所の陣」が見えます。説明板の10代田原親述(のぶ)は大友家の内紛にちょっかい、いろいろ介入しての結果が、宗麟の祖父義長の遺命「田原許すまじき候」、大友本家との対立は深刻です。親述の父・9代親宗も同じくいらぬお節介で美濃崎で討たれて、大塔山古墳のてっぺんにその墓があり。なお、田原家3代武勇の田原直貞は菊池攻略の恩賞で領土を増やし、その次男・正堅が分家して吉弘家を興します。その末裔が猛将吉弘統幸加兵衛です。石垣原戦での井上との一騎打ちは無いようです。母里は投降勸告使です。

3. 成仏 285.7 3等三角点 「御所ノ陣」取り付けすぐ先



(写真1 珍しい石垣)

コンクリ道路の下り点から右の軽やぶに入ると7分。見張り台があったかもしれない。

4. 佐野の鞍懸城・116 豊後高田の河内小学校さきの桂川を北へ渡り、東の神社の最初の家の庭から入ると、最初ま竹の子林が造林もまばらとなって歩きやすい。まず目につく約100mの石垣が珍しい(写真1)。コンパクトな土塁・空堀・虎口(写真2)は見どころ十分で軽で行けるおすすめ城跡



(写真2 虎口)

10分です。南は桂川の崖、北も崖の地形だが、中弱い。大軍が籠城する城ではない。田原親貫は安岐城から逃げ、ここで敗戦

5. 奥田の鞍掛城・390・県下最難所の山城 **6. 田原山城** 大田村史跡・380

「富来浦、香々地、若宮」

私の無名山ガイドブック N055
宮野浦と名護屋崎

飯田勝之 (10912)

複雑を極める蒲江の海岸線。幾つもの入り江と幾つもの岬。そんなたくさんの岬の中で今回は二つの岬への稜線歩きを紹介しよう。

宮野浦

旧蒲江町と米水津村との境界をなす稜線は、東に延びて海岸線に至ると細長い半島となりその先端部は日向灘へ落ち込んでいる。先端部が「キシメギ崎」でその少し手前に三等三角点の宮野浦がある。

県道畑野浦宮野浦線(黒潮ライン)を関網から南にカーブしながら登っていくと、大きな右カーブの外側に駐車場がある。ここより南に300mほど行ったところから左の崖に細い道が上っており、これをたどり照葉樹の林の中を登り詰めると215mの標高点で、ここより東に向かって急斜面を下ると小鞍部に至る。ここからこの小半島の稜線歩きが始まる。稜線上は最初の小鞍部付近の北側に一部スギの植林地があるほかは、全山が照葉樹の二次林で、稜線はタイミンタチバナ、ツバキ、ヒシヤカキ、バリバリノキ、イヌガシなどの木立の中、下草はなく歩きやすい。いったん150mの小ピークを越したら長い緩い下りで、下りきったあと、小さなピークを二つ越えると海拔55mの最低鞍部にいたる。そこからやや急な斜面を登って大きなピークを登り越して小さく下ったあと、もう一つピークを登り越し、緩く下ってもう一度突き上げた



ところが半島最後のピークで、やや広い頂上のほぼ中央に三角点がある。

○参考タイム…県道～

10分～215m標高点～50分～三角点 (2万5千地形図：沖黒島)

名護屋

名護屋湾と猪串湾との間に細長く南に突き出た半島は、その先端が屋形島より南にせり出している。この細長い半島には二つの三角点のピークがある。中程に高森、先端部に名護屋がある。この稜線歩きは結構楽しい。半島稜線の北半分にはスギやヒノキの植林地が一部あるが、殆どが照葉樹の多い天然林で覆われており、全山がシイ、カシ、タブ、ヤマモモ、ヒサカキ、タイミンタチバナ、ツバキなどの照葉樹で覆われている。

登り口は国道388号の越田尾旧隧道の東側から。トンネル手前左手の植林地から入ると、わずかに踏み跡があり、斜めに植林地を登っていくと数分で稜線に達する。あとはそのまま左に稜線歩きである。左ヒノキの植林地、右天然林の境界に踏み跡道があり、快適な稜線歩きができる。左斜面のヒノキ林も終わって、緩く上って最初の小ピーク。わずかに下って緩く登っ

て次のピークで直角に左の折れる。緩く下って緩い右カーブで緩い登り、数分で小さく下ってまた緩い登りをつめると県道から45分余りで南北に長い鈍頂に達し、広く伐り開かれた林の空間の中央に三等三角点がある。点名高森である。ここから緩く下りながら10分ほどでやや左に急斜面の下りとなり、緩いアップダウンが続き、高森から50分余り、両側が切れ落ちて、遙か下方に磯を見るやせ尾根を通過する。緩く登り返して小さな丘を右回りに回り込むと、木立の中に小広場があり、その隅に金刀比羅宮の石の祠がある。ここまで来ると目標は近くて、目の前の小ピークは右に蒔



き、礫岩の多い鞍部を行くと、左方に磯を見ながらのちょっとした岩稜登りで丸い小さなピークに達する。展望の良い岩峰の上で、その中央に四等三角点がある。

○参考タイム…旧県道トンネル口～45分～高森三角点～90分～名護屋崎 (2万5千地形図：蒲江)

会務報告

登山入門教室・座学講座終わる

今年で3回目の迎える登山入門教室が去る8月27日(水)開講され、10月8日(水)、9月24日(水)、9月10日(水)と延べ4日間8時間にわたる座学講座が終わった。この講座は平成24年にトレッキング入門講座として実施されて以来続けている初心者向けの登山教室で、今年は定員30名に対して応募期限までに33名の受講申込があり、定員を超えて希望者全

(開校式・8月27日・ホルトホール会議室)



員を受け入れて大分市ホルトホールで開始した。講座は前年とほぼ同じ構成で、座学が4日4回8講座で、その内容は、第1回講座8月27日(水)①山に登ろう(楽しく楽な山の登り方を山登りのスタートから)講師:星子貞夫、②より安全な登山のために(事故や遭難をしないための心構えや対応など)講師:首藤宏史、第2回講座9月10日(水)①山登りの楽しみ方(低山からエベレストまで山登りのいろいろな楽しみ方など)講師:大平展義、②山の装備や道具(山に必要な装備や道具の選び方、使い方など)講師:西あずさ、第3回講座9月24日(水)①山の紹介と登山計画(いろんな山とそのルートの紹介や登山計画の立て方など)講師:安東桂三、②山での病気やけが(山での病気やけがの救急対応・ファーストエイドなど)講師:野村芳雄、第4回講座10月8日(水)①山の地図の見方(地図の見方、地図と磁石の使い方、GPSの使い方など)講師:飯田勝之、②山の天気の見方(天気図の見方、天気予報のとらえ方、山の気象学など)講師:佐藤秀二で、全て会員の手作り講座としての実施である。

この講座の目的は、より多くの人たちに山登りの楽しさと素晴らしさとその味わい方を知ってもらうと同時に、大自然を相手にしてのスポーツとして、その中に秘められている危険やアクシデントの可能性を知ってもらい、それらに対応できる基礎的知識や技術、技能を知ってもらうことにより、よりいっそう山登りの楽しさを深めてもらうことにある。そしてその受講者の中から、日本山岳会の会友や会員になって、会の増強と活性化につなげる・・・それがこの講座の目的

である。

今回の講座受講者は8講座の受講を終えたが、今後さらに11月15日(土)16日(日)に杵築市大田村横岳キャンプ場でのキャンプ体験と鋸山登山、12月20日(土)21日(日)に九重ヒュッテに泊まって、山小屋泊まり体験と泉水山と三俣山の冬山体験登山の二回にわたる実践登山講座を終えて、全課程を修了する予定である。これらの体験を通じていっそうすばらしい山登りの仕方を会得して欲しいものである。

支部合同会議報告

去る9月20日(土)21日(日)の2日間にわたり支部合同会議が東京都千代田区6番町のプラザエフ会議室で開かれた。この支部合同会議は、昨年まで別々に開催されていた支部長会議と事務局担当者会議をまとめて一回の開催にしたもので、当支部からは加藤支部長と飯田が出席した。

会議は森会長の挨拶のあと、会務報告が行われた。その主な内容は①当会の組織体制については、支部の位置づけの明確化や各種委員会やプロジェクトチーム組織の見直しなどをおこなったこと。②次期人事の基本方針については70歳年齢制限は現行通り踏襲することとし、総会での役員の信任投票制度を導入することとなったこと。③会員の動向については高齢化が進んでいる実態が報告された。この中で各支部別の平均年齢一覧が示され、全平均年齢が68歳の中で、東九州支部が61歳で3支部で一番若いことになっていた。④寄付金・助成金の受け入れについては、支部で受け入れた寄付金・助成金は速やかに本部の報告するよう指示があった。⑤支部事業への交付金制度については、新しく新入会員一人あたり4,000円(入会金の20%)を支部に還元することや、次期リーダー育成や会員増強のための支部の事業の新たな事業に対して助成金制度を設けたこと。⑥110周年記念事業については、尾上前会長を実行委員長とするプロジェクトチームを発足させて検討が開始されていること。⑦登山計画書の提出については、今後支部が主催する山行は全て事前に本部に報告することなど

の説明があった。

⑧・連絡事項では新入会員の年会費の入会月別会費制度のスタート(何時入会しても入会時に年会費12,000円となっていたが、今後は加入月割で初年度の年会費を納めればよいようになった)、・年会費の銀行口座振替の促進依頼、・トレイルラン事業への名義後援は一般登山者の安全や環境保全の観点で断ったこと、・300名山のガイドブックの完成、会員には特価販売開始。販売開始により支部に印税を還元する、・JACのホームページの利用促進などの説明があった。

続いて協議事項の支部活性化を考えるでは、新入会員の入会金の一部還元、支部事業への助成金制度、山の日制定の経過、ユースクラブと安全登山普及講習会、家族登山普及ツールなどの説明がなされ、続いて各支部が順次支部の取り組み当について発表があった。

支部活性化に関する議題の主な協議テーマは「会友制度」で、全国32支部のうち、22支部に会友制度をおいている現状で、会友制度が会の活性化や会員の増強に繋がっているかどうかということが課題となっている。東海支部のように会友加入条件が、3年以内に会に加入することとしている支部があるが、ほとんどの支部の会友制度はそこまでしていない。会友制度はJACの会のために本当になるのか、なるとしたらどんな活用があるのかなどJAC全体での検討もこれからの課題であろう。

初めての支部合同会議は初日が終わったあとの懇親会も含めて、支部同士の交流と、本部と支部の意見交換の場として、2日間の日程は有意義なうちに終わった。



(支部合同会議・9月20日)

お知らせ

※ 会員の皆様、本部年会費納入の口座振替制度が始まりましたが、まだ手続きの終わっていない方は早めによりしくお願いします

忘年山行と忘年会のお知らせ

今年の忘年山行と忘年会を次のような日程で実施します。今年も毎年恒例のゲスト、重廣恒夫さん(JAC関西支部長)が山行と忘年会に出席します。

年に一回の支部会員(会員・会友)が一堂に会する場です。みんなで和やかに集い楽しみましょう。みなさん万障お繰り合わせのうえご参加下さい。

忘年山行 12月13日(土) 桑原山(1408.0m)

12月14日(日) 佩楯山(853.8m)・椿山(559.0m)

忘年会

場所 直川 鉢泉「山本旅館」佐白市直川 赤木1252番地

TEL・0972-58-3311 FAX・0972-58-3377

日時 12月13日(土) 午後6時から

会費 10,000円(15日の山行参加者の弁当は別)

集合場所と時刻

12月13日(土) 午前7時 大分駅上野の森口

現地集合の場合 8時30分 道の駅「うめりあ」

12月14日(日)の山行に朝参の場合

午前9時 虫月公民館前集合

忘年会参加 13日(土) 午後5時30分 「山本旅館」受付

参加申し込み: 13日山行・13日忘年会・14日山行の三つに区分して、各々の参加について11月28日(金)までに事務局へご連絡下さい。

年次晚餐会と一緒に参加しましょう

会員の皆さんはすでに本部から案内状が届いていると思いますが、年次晚餐会に参加できる方は是非一緒に参加しませんか。

日時 12月6日(土) 午後6時から

場所 東京・京王プラザホテル: 本館5F

会費 15,000円

受付開始 午後1時30分から

講演会 午後2:00~5:00

図書交換会 午後2:00~5:00

出欠の返事のはがき投函は11月15日までです。

月例山行のご案内

※12月の月例山行は諸行事と重なるために忘年山行と兼ねることになりました。

1月月例山行：俵山(1094.9m) 熊本県

日時・1月18日(日)

出発・午前7時

集合場所・大分駅上野の森口広場

参加申込及び問い合わせ連絡先・1月9日(金)までに

リーダー：阿南寿範 (080-3187-2003) まで

2月月例山行：仰鳥帽子山(1301.8m)

フクジュソウの山です

日時・2月21日(土)～22日(日)

出発・21日(土) 午前10時発

集合場所・大分駅上野の森口広場

参加申込及び問い合わせ連絡先・1月13日(金)までに

リーダー：加藤英彦 (080-2724-2438) まで

※ 各山行時の準備する食糧や装備及び配車等については、事前に担当リーダーとよく相談しておいて下さい。

新版「日本300名山」

日本山岳会編・山と溪谷社出版

上・中・下各巻定価2,300円

日本山岳会員特価

1,610円(30%off)(税別)

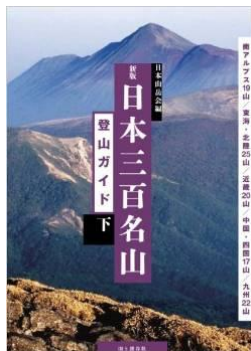
※購入希望者は事務局まで

20,000円以上購入の場合送料

無料となるため、申込者がま

とまったら申し込みます。希

望者はお早めに。



③ 平成27年と計画について

④ その他

※ 各役員においてはあらかじめ予定しておいて、万障お繰り合わせのうえご出席下さい。

後記

- ・台風と冷たい雨にたたられた今年の夏山。思いっきりに楽しい夏山とはいかなかったのではないのでしょうか。秋になっても天気は長続きしませんでした。
- ・台風は支部の行事にもねらいを合わせたように迫ってきました。でも、青少年体験登山は少しずれて、かえって良い山登り日和をもたらしてくれました。そして、韓国の岳人との交流の場も、目的の祖母山には登れて、まあ良かったです。
- ・台風と合わせて今年は火山活動が登山者を脅かす年にもなりました。御嶽山の噴火は、山登りに対する火山活動の危険性を教えてくれました。韓国の岳人との交流で思い出すのは4年前も荒れ模様かえびの高原でしたが、あの時に登れたえびの高原から韓国岳への登りは、霧島山の火山活動で閉鎖されました。
- ・大分の山では九重山の硫黄山や鶴見岳、仰鳥帽子山なども活火山で、何時噴くか分からない山です。注意しましょう・・・、といっても今は穏やかだし・・・、そんな穏やかな山が突然噴くなんて、そんな時に登っていたなんて・・・、本当に人間って運ですよね・・・、御因縁という言葉を思い出します。

(K・I)

第5回支部役員会の開催案内

日時・11月19日(水) 午後6時30分より

場所・大分市「コンパルホール」

議題・① 登山教室実践講座について

② 忘年登山と忘年会について

公益社団法人日本山岳会東九州支部 東九州支部報 第67号

2014年(平成26年)10月25日発行

発行者 加藤英彦

編集者 飯田勝之・中野 稔

発行所 事務局

〒874-0820 別府市原町5-1-4 飯田勝之方

TEL・FAX 0977-21-3437

Email yamatomoki@ari.bbiq.jp